

# 中等教育における日本語教室と 日本文化・日本語を地域の人々に伝える行動の意義

## —自律と協働のための教育—

赤石恵理子(日本文化発信プログラム<sup>1)</sup>)  
erikomylove1014@hotmail.com

### 1. はじめに

本稿では、ハンガリーの中等教育機関における日本語教室の実践を報告する。この教室の主目標は、教室外学習を取り入れた日本語教室と生徒・教師協働による日本文化・日本語を地域の人々に伝える行動を通じた、参加生徒の自律と協働である。なぜこのような日本語教室が有用なのか、その意義を日本語を学習する必要度が低い国の人格形成期に当たる中等日本語教育の見地から述べ、教室の実際と生徒の変化を示し、課題を明らかにする。

### 2. ハンガリーの日本語教育

#### 2-1. 中等教育機関の学習目的

ハンガリーの日本語教育機関の43%を占める初中等教育機関<sup>2</sup>の学習目的の上位3位は、「日本の文化に関する知識を得るため」「日本語という言葉そのものへの興味」「国際理解・異文化交流の一環として」である<sup>3</sup>。大きな日本語コミュニティがなく、日本語を使う機会があまりない国の中等教育機関においては、実利的な目的の日本語学習が存在しにくいようである。「大学や資格試験の受験準備のため」は学習目的の上位を占めていない<sup>3</sup>。

#### 2-2. 学習者のビリーフス

2009年のカポシュヴァール市の高校生の学校生活は、学習、クラブ活動、学校行事などの全てが教師の誘導によって成り立っていた。何をするか、何ができるか、その実現のために何をしなければならぬか、しなければならぬことをどのような計画のもとに行うか、それらを考えるのはほとんどの場合、生徒ではなく教師だった。教師依存は教室内外の関係を教師と各生徒間に限定し、生徒間の教え合いや助け合いを阻害した。日本語教室を休んだ生徒の多くはその回の学習内容をクラスメートに聞かず、クラスメートも教えなかった。休む回の個人授業を筆者に申し出る生徒もいた。

この教師依存は根深いものであることが、若井・岩澤(2004)と宮崎・阪上(2009)のハンガリー人日本語学習者のビリーフスについての報告によって確認される。若井・岩澤(2004)が2002年に行ったビ

---

<sup>1</sup> 外交発信力の具体的方策の一つとして、青年海外協力隊の派遣が終了した中東欧4カ国(ブルガリア、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア)の一般民衆を対象に、日本語教育を行い、日本文化を伝える外務省事業。平成20年度開始、平成22年度終了。

<sup>2</sup> 2008年12月、国際交流基金ブダペスト日本文化センター調査結果。

<sup>3</sup> 2006年海外日本語教育機関調査結果。

リーフ調査は、ハンガリー人日本語学習者は共産主義時代の「到達目標設定システム」の影響を強く受け、「①学習到達目標は学習者や教師が考えるのではなく、あらかじめ設定されているものとして理解している。②自律性は決して高いとは言えず、目標を達成するためには教師の指示に従うのが最も近道と考える傾向がある」と報告している。また、ハンガリー人日本語教師について、「到達目標設定システム」の中で教育を受け、学習に成功した背景から、100%が「教師が学習者を一生懸命勉強させなければならない」と考え、71.4%が「学習者は外国語をどう学習すればいいか知ろうとしたり、自分でいろいろな学習方法に挑戦したりするよりは、教師の言う通りに学習したほうが上達が早い」と考えているとも述べている。宮崎・阪上(2009)のエルテ大学・カーロリ大学の学生を対象とした2008年のビリーフ調査も、2003年のlanguage Education Policy Profileという外国語教育政策の転換にも拘らず、教師依存の傾向に変化は見られなかったと報告している。この調査は、「中等教育では今もなお『到達目標設定システム』の影響を強く受けた授業が続けられている」という学生の意見も紹介している。

### 3. 学習者の自律と協働

2-1.と2-2.を背景に、筆者は2009年11月、カポシュヴァール市高校生日本語教室(以後「カポシュヴァール教室」)の主目標を自律と協働と設定した。佐久間(2006)によれば、生徒が「人格形成期」にあたる中等教育段階の教師は、日本語教師である前に教師であると自覚するべきである。2001年に策定されたCommon European Framework of Reference for Languages(「CEFR」)も外国語学習が育成すべき学習者の能力を「一般的能力」と「コミュニケーション言語能力」と定義し、人間が成長の過程で備えるべき「一般的能力」の一つとして「学習方法の学習」を掲げている。「学習方法の学習」の最終目標は自律であろう。そして、西川(2008)によれば、生涯を通じて教育で求められる人格形成は、「より多くの他者と関われる」能力の獲得である。

### 4. 「参加型手法による協働型授業」

自律と協働を主目標とした日本語教室の設計に当たり、武蔵野市国際交流協会の「参加型手法による協働型授業」(杉澤2002)と国際交流基金日本語国際センター(以後「センター」)の交流活動(押尾他2004、木谷・前田2006)を参考にした。これらは日本の初中等教育機関の児童・生徒と外国人との学習の実践である。

「参加型学習」では、学習者と教師が、学習者同士が、更には学習者と外部からの参加者がともに議論する中で、問題の原因を考え、解決方法を探していく。その過程を通して、相互の学びが促進されると考える(山西2002)。杉澤(2002)は、「参加型学習」の理念に基づいて武蔵野市で行った地域に暮らす外国人が共に作業する仲間として学校の授業に参加する「協働型授業」について、子どもたちは外国人が異なる文化的背景から発想することと自分が発想することの違いや共通点を発見しながら、他者と協働して一つのものを作り上げていく過程を楽しんだと報告している。

センターによる海外現職外国人日本語教師と日本の中学校・高等学校の生徒・教員との交流活動は、双方にとって様々な気づきや発見、振り返りの機会になった(押尾他2004)。木谷・前田(2006)は、センターの3タイプの交流活動の中の、外国人教師が中高生ボランティアの支援を受けて、自身の授業や教室に必要な素材を収集し、それらを教材化する「素材収集型」に焦点を当て、交流活動を実施した。その結果、教師と生徒という役割や教室や授業という枠にとらわれずに活動する中で、生徒は置

かれた状況や環境に積極的に関わっていかうとする態度や技能を育んだ(木谷・前田 2006)。木谷・前田(2006)は、このような学習を進めるために必要なことは、生徒に自分自身を振り返り、異なる見方をする他者の存在を知り、共通の目標を達成する喜びを感じられるような機会をどう提供できるかという課題を解決することであると述べている。

## 5. カポシュヴァール教室の実際

この「参加型手法による協働型授業」を理念とし、生徒の自律と協働を目標にした日本語教室設計の実際を述べる。

### 5-1. 学習者

課外授業として任意受講するターンチチ生徒と「日本語を習いたい」と自らターンチチの門を叩いた近隣3高校の生徒である。ほとんどが日本語・日本文化が好き、または興味があるが、日本語を実用のために学ぼうとは考えておらず、日本学科進学也希望も多くない。

### 5-2. 基本設計

継続的な教室学習と断続的な教室外学習、日本文化・日本語を地域の人々に伝える行動(以後「日本を伝える行動」)を組み合わせた。主に、教室学習は4.で記した「生徒が自分自身を振り返り、異なる見方をする他者の存在を知る」場、教室外学習は「異なる見方をする他者の存在を知る」場、日本を伝える行動は「共通の目標を達成する喜びを感じられる」場である。「教室や授業の枠にとらわれない」ことを重視し、教室外学習のみならず、日本を伝える行動においても積極的に学校の外へ出た。教室外学習と日本を伝える行動の内容は、表5と表6を参照されたい。

表1 カポシュヴァール教室の基本設計

2009年 9月	日本語教室 (教室学習+教室外学習 1~4)	日本文化・日本語を地域の人々に伝える 行動 1~8
↓	教室学習開始 教室外学習 1	行動 1
2010年 8月	↓ 教室学習終了 教室外学習 4	↓ 行動 8

### 5-3. 教室学習の概況

生徒自身が費やしたいと考える時間の多少によって、4つのクラスに分けた。

表2 教室学習の概況

クラス		生徒数	時間数	使用主教材
ターンチチ	Very Slow Basic	3	45分×1回/週	オリジナル教材
	Basic	2	45分×2回/週	オリジナル教材
	Quick Basic	1	90分×3回/週	『みんなの日本語』
近隣3高校合同	Slow Basic	9	45分×2回/週	オリジナル教材

#### 5-4. オリジナル教材を使用した教室学習の内容

日本の高校生について表 3 のテーマでオリジナル教材を読み、自分についても同じテーマで伝える練習をする。テーマの策定にあたっては、土屋(2005)の外国人集住地域における外国人住民と日本人住民の相互理解と課題発見を目的としたボランティア日本語教室の実践を参考にした。

表 3 オリジナル教材を使用した教室学習のテーマ

学校の勉強、私の家族、私の家、学校生活、私の習慣、祭り・行事、好きなこと、私の街・国、旅行、料理・食べ物、大切なもの
--

表 4 オリジナル教材の内容

1	写真(“Deai Website”の 7 人の日本の高校生の写真を表 3 のテーマごとにまとめて転載。)
2	テキスト(“Deai Website”の 7 人の日本の高校生のエッセイを表 3 のテーマごとにまとめ、初級学習開始後日が浅い段階で学習可能な文法項目・語彙でリライト。)
3	語彙リスト
4	文法項目のハンガリー語解説(カーロリ・ガシュパール大学(2006)『みんなのほんご I Nyelvtani magyarázatok Károli Gáspár Református Egyetem Intenzív nyelvtanfolyam』から該当箇所を転載。)

#### 5-5. 日本を伝える行動のプロセス

日本を伝える行動の方法の詳細を、「準備」「発表会・講習会・教室開催」「振り返り」の 3 段階に分けて時系列に沿って示す。

##### 準備

- ・どんな日本文化・日本語を地域のどんな人々に伝える行動をするかを教師が生徒に伝え、生徒の参加を募る。
- ・リサーチ：生徒と教師がその日本文化についてウェブサイトなどを通して各自で調査する。
- ・勉強会：生徒全員と教師がリサーチ結果を発表する。日本語使用が目的ではなく、情報の分かち合いが目的であるため、発表はハンガリー語で行う。
- ・練習：その日本文化技能を生徒全員が教師から習得する。2 回目以降、技能習得が早い生徒が遅い生徒に教え、遅い生徒は早い生徒に習う。必要に応じ、各生徒で自宅練習を行う。練習の準備と後片付けは毎回生徒全員が協働して行う。
- ・ミーティング：生徒全員と教師で、地域の人々を対象にしたその日本文化技能の発表会・講習会・教室開催の準備をする。構成は生徒と教師が協働して作成し、内容の詳細はリサーチ結果を基に生徒が決定する。受講者代表との連絡や受講者アンケート作成などを生徒と教師が協働して行う。

##### 発表会・講習会・教室開催

- ・生徒全員と教師がその日本文化技能を観覧者・受講者に発表・指導する。生徒が進行と指導をハンガリー語で行う。教師は指導に参加するが、進行は行わない。

##### 振り返り

- ・生徒と教師が各自で得た終了後の受講者からの反響を共有する。生徒全員と教師が、受講者アンケ

ート集計を基に、評価が低かった内容について原因を話し合う。

## 6. 調査方法とデータ分析

### 6-1. データの内容

教室外学習を取り入れた日本語教室と日本を伝える行動を通して、生徒がどのような気づきを得、どのような経験をしたと認識したかを探るために、カポシュヴァール教室終了時に、①選択肢アンケート調査、②自由記述アンケート調査、③自由記述と選択肢を併用した自己評価を行った。①は、「カポシュヴァール教室全体、教室学習、各教室外学習、各日本を伝える行動はどうでしたか」という問いに対して「とても良かった」「良かった」「あまり良くなかった」「全然良くなかった」、または「とても満足した」「満足した」「あまり満足しなかった」「全然満足しなかった」からそれぞれ一つを選択するものであった。②は前者の回答の理由を自由記述するものであった。③は「したかったこと」を自由記述し、「それができたか」を「できた」「少しできた」「無回答」で回答するものであった。質問文は日洪両語で記し、9名がハンガリー語で、2名が日本語で回答した。自由記述の分析は、内容の同じものをカテゴリー化して行った。アンケート実施時に不在の生徒がおり、カポシュヴァール教室参加生徒数15と回答生徒数11は一致しない。また、教室学習には参加せず、教室外学習のみに参加した生徒がいたため、表5の参加人数は一定ではない。

### 6-2. データの分析結果

カポシュヴァール教室全体については、回答生徒11名全員が「とても良かった」、教室学習についても11名全員が「大変満足」と答えた。教室外学習と日本を伝える行動については、表5と表6に示す。これらの結果から、生徒はカポシュヴァール教室に満足していたことが確認される。

表5 教室外学習を参加生徒がどう評価したか

評価項目		参加人数	評価・人数
教室外学習	1 日本人学校見学 2009年10月 日本人学校（ブダペスト市）	11	大変満足 9 無回答 2
	2 日本の高校生との文通 2010年11月～	16	大変満足 7 満足 2 無回答 1 回答時不在 6
	3 日本料理教室 2010年6月 ターンチチ・教師自宅 (カポシュヴァール市)	12	大変満足 10 回答時不在 2
	4 俳句会 2010年3月・6月 教師自宅（カポシュヴァール市）	14	大変満足 9 満足 1 回答時不在 4

表 6 日本を伝える行動を参加生徒と受講者がどう評価したか

	行動・時期・場所	参加人数	評価・人数
1	スピーチコンテスト・パフォーマンス 2009年10月～11月上旬 エルテ大学（ブダペスト市）	生徒 3	大変満足 3
2	書き初め稽古・書き初め展 2010年1月 ターンチチ（カポシュヴァール市）	生徒 15	大変満足 11 回答時不在 4
		観覧者 800	
3	合気道愛好者・ロシア系住民書き初め講習会 2010年1月 ターンチチ（カポシュヴァール市）	生徒 2	大変満足 2
		受講者 12	大変満足 12
4	学芸会パフォーマンス 2010年3月 ターンチチ（カポシュヴァール市）	生徒 2	大変満足 2
		観覧者 350	
5	浴衣着付け稽古・浴衣着付けデモンストレーション 2010年3月～4月 ターンチチ（カポシュヴァール市）	稽古生徒 13	大変満足 11
		デモ生徒 5	回答時不在 3
6	異文化体験教室-自分の名前を日本の文字で書いてみよう！- 2010年4月 ロズゴニ・ウーティ小学校（ナジカニジャ市）	生徒 4	大変満足 4
		受講者 58	大変満足 46 満足 12
7	異文化体験教室-浴衣に挑戦！- 2010年5月 ロズゴニ・ウーティ小学校（ナジカニジャ市）	生徒 2	大変満足 2
		受講者 18	大変満足 13 満足 5
8	ウェブサイト制作 <sup>4</sup> 2010年6月～	生徒 6	未調査

自己評価では、「したかったこと」として「日本語学習」が 18 コメント、「日本文化経験」が 4 コメント挙げられ、それが「できた」はそれぞれ 15、4 だった。「したかったこと」にはなかったが「できた」に挙げられたことには、日本文化経験 14 コメント、人間関係形成 8、発表 5、日本語使用 1 があった。

続いて、生徒がどのような気づきを得、どのような経験をしたと認識したのかを詳述する。アンケート調査の自由記述では、11名の生徒から 58 のコメントが得られた。それらを内容の同じもの、類似のものに分類・整理した結果、生徒の気づきと経験は大きく 5 つのグループに集約された。カポシュヴァール教室の目標である「自律をした」と認識した生徒数は 1 名、コメント数は 1、「協働をした」と認識した生徒数は 4 名、コメント数は 5 だった。「人間関係を形成した」と認識した生徒数は 7 名、コメント数は 7 だった。自己評価に、「人間関係形成ができた」が 8 コメントあり、自律に関するコメントがなかったことから、生徒の自律の実現度は極めて低かったと言わざるを得ない。

<sup>4</sup> カポシュヴァール高校生日本語教室生徒が制作・運営。教室外活動と日本を伝える行動をハンガリー語で紹介している。日本語作文や日本語ビデオなども掲載している。<http://mynihongo.qwqw.eu/>。

表7 自由記述アンケートに見られた生徒の気づきと経験

	生徒の声	コメント数
① 気づきを得た。	日洪の文化的相違に気づいた。 日本語の特徴、日本語学習の方法、日本語を楽しむ方法に気づいた。 上達の鉄則に気づいた。	12 (20.7%)
		11 (18.9%)
		2 (3.4%)
		(43.0%)
② 精神的充足を得た。	人に喜びをもたらすことができた。 挑戦し、成功できた。 未知の物事を知ることができた。	6 (10.3%)
		5 (8.6%)
		5 (8.6%)
		(27.8%)
③ 人間関係を形成した。 協働した。	人と出会い、ふれあえた。 仲間と協働できた。 どうしたら子どもと効果的にコミュニケーションができるかを考えた。	6 (10.3%)
		5 (8.6%)
		1 (1.7%)
		(20.6%)
④ 自尊感情を育んだ。	人に認められた。 自分たちは唯一無二の存在だと気づいた。	3 (5.2%)
		1 (1.7%)
		(6.9%)
⑤ 自律した。	大人としてどう振る舞い、責任を持ったらいいかを考えた。	1 (1.7%)

次に、教室外学習と日本を伝える行動に参加した回数と「人間関係を形成した。協働した」「自律した」という認識の関係を表8に示す。アンケートに回答した生徒11名中、生徒Aは参加回数が最も多く合計11回、表7の③⑤のコメント数は2であった。生徒Vはカポシュヴァール教室参加期間が最も短かったため、参加回数も最も少なく、合計4回、③⑤のコメント数は0であった。11名の合計参加回数の平均は6.72回、③⑤のコメント数の平均は1.18であった。合計参加回数が平均より多く、③⑤のコメント数も平均より多かった生徒は2名、合計参加回数が平均より少なく、③⑤のコメント数も平均より少なかった生徒は5名、合計参加回数が平均より少なく、③⑤のコメント数は平均より多かった生徒は2名、合計参加回数が平均より多く、③⑤のコメント数は平均より少なかった生徒は2名であった。従って、教室外学習と日本を伝える行動に参加した回数と「人間関係を形成した。協働した」「自律した」という認識は比例の関係が強く、参加回数が多ければ、自律し、協働する可能性が高くなると言い得る。

表8 教室外学習と日本を伝える行動に参加した回数と表7③⑤のコメント数の関係

生徒名	教室外学習 参加回数	日本を伝える 行動参加回数	合計参加 回数	③コメント 数	⑤コメント 数	③⑤コメン ト数の合計
A	4	7	11	1	1	2
V	2	2	4	0	0	0
平均	3.54	3.18	6.72	1.09	0.09	1.18

## 7. 考察

### 7-1. 自律について

自律をしたと認識した生徒が A1 名に留まった原因を究明する。A は表 2 に示した Quick Basic の生徒であった。教室学習の時間数と進度、日本語の聴解力はカポシュヴァール教室の生徒の中で突出していた。日本を伝える行動の準備段階にも、突出した積極性で参加していた。他の生徒は A の突出を認識していたため、教室外学習においても日本を伝える行動においても、A 依存を起こしていたと考えられる。

更に、4 回の教室外学習においても 7 回の日本を伝える行動においても、内容が日本文化・日本語であったため、日本人教師＝教える側、生徒＝教えられる側という役割固定の傾向から抜け出しにくかった。この役割固定が生徒の積極性を阻害したと考えられる。

### 7-2. A が自律を実現した背景

A は 2010 年 5 月、カポシュヴァール教室参加前からの経過を振り返った筆者との会話において以下のように述べている。

どのハンガリー人の先生にも自分で考えて行動する責任を与えてもらったことはありませんでした。先生が生徒に指示を与え、生徒は与えられた指示をこなすというハンガリー人の先生との間で慣れたスタイルと違ったので、書き初め講習会の時は驚きました。でも、自分で考えて行動することは大人としてとても大切だと今は思っています。

今私は積極的です。幾人もの人々が関わって何かをするような場面に前は関わろうとしませんでした。でも、今は違う。

上掲引用発言の下線部は、A が自律し協働する人格を備えたことを裏付けている。

では、A に自律を促した要因は何であったのか。①教師がハンガリー人とは異なるビリーフをもった外国人であったこと、②自分が強い興味関心を抱いている内容の教室外学習と行動であったこと、③他の生徒とも行動の受講者とも興味関心を共有しており、安心感と一体感があったことは、他の生徒とも共通の条件である。A のみが自律を実現し得た背景は何であったのか。

#### 性格要因

A は柔軟で、頑なさが無かった。筆者とともにゼロから日本語学習をスタートし、日本語という新しい世界に開眼していく日々の中で、学ぶ喜びと筆者への信頼を膨らませた。この経過について、A は以下のように述べている。

高校 11 年生の 11 月に『ごくせんⅡ』を見ました。日本の高校の先生と生徒の関係を描いたドラマでした。それから、日本に興味をもちました。でも、そんなに大きい興味じゃありませんでした。高校 11 年生の 2 月に先生が来ましたから、日本語を勉強してみました。勉強したら、日本語はこんなにおもしろいものかと思った。先生に会わなかったら、日本語がこんなに好きになって、日本語に恋をすることはありませんでした。

A の柔軟さが筆者への信頼を育んだ。その信頼によって、筆者の教育目標が A には 100%に近い状態

で伝わったと考えられる。

### 環境要因

A には母という学ぶ喜びの理解者が存在した。母娘はメッセージを記したカードやプレゼントで喜びを筆者に伝えるほか、筆者を日帰り旅行へ招いたり、筆者とカポシュヴァール教室のクラスメートを自宅へクリスマスパーティーに招いたりした。学ぶ喜びの理解者の存在は A が学ぶ喜びと筆者への信頼を高く保ち続ける要因であった。

### 教育の成果

A はカポシュヴァール教室の中で、筆者とともに過ごした時間が最も長い生徒であった。教室学習のほか、日本を伝える行動のハンガリー語受講者アンケート作成、受講者アンケートのハンガリー語から日本語への翻訳など、カポシュヴァール教室のために他の生徒の数倍の時間を費やした。カポシュヴァール教室外でも、「環境要因」で述べた日帰り旅行や A の母が勤務する音楽学校のコンサート、A の父が演奏するハンガリー民族音楽のコンサートなどでともに時間を過ごした。教室の内外でともに過ごした時間の長さ、過ごした場所・場面の多様さ、交わした会話の内容の多様さによって、A にとっては筆者が「日本人の先生」や「日本語の先生」ではなく、「先生」になり、「赤石恵理子」という一人の人になっていた。以下は A のアンケートの自由記述と A が筆者にくれた卒業写真の裏に記していたメッセージである。(原文掲載)

わたしはたくさんべんきょうしました。日本語だけじゃありませんでした。世界について、じんせいについて、日本のぶんかについてべんきょうしました。

心からありがとうございました。私のいちばん好きな先生は、あかいしえり子先生でした。

中等教育においては、生徒と教師が教室の内外で過ごす一見学習とは無関係な時間の積み重ねにも意味がある。その時間の積み重ねによって醸成される生徒と教師の人としての相互理解が、教育目標の達成に大きく貢献すると考えられる。

## 8. 今後の課題

教室外学習を取り入れた日本語教室と日本を伝える行動によって、生徒の自律と協働を実現し、人格形成を促進するために、以下の 3 点を課題としたい。

### より多くの生徒の参加

教室外学習と日本を伝える行動へ、より多くの生徒の参加を促したい。6・2.で述べた通り、参加回数が多ければ、自律し、協働する可能性が高くなる。

### 自律の実現

自律の実現度を高めるため、生徒間で依存が起こらないよう配慮する。生徒による学習の自己管理が可能になるよう、オリジナル教材の配布時期に配慮し、市販教材の自由な活用も促す。そして、教師と生徒という役割や教室や授業という枠にとわられない方法を模索したい。日本文化・日本語を内容とした教室外活動とそれを伝える行動は、カポシュヴァール教室参加生徒共通の興味関心であり、安心感と一体感を作り出し易いという利点がある反面、教師と生徒の役割固定が起こりやすいという難点がある。どのような教室外活動、または日本を伝える行動をいつ、どこで行うかという教室設計

自体を生徒が行えば、生徒は自発的に能動的になる可能性が高い。更に、教室外でともに過ごす機会を増やし、生徒と筆者の生徒と教師という関係を越えた人としての相互理解と生徒同士の相互理解を醸成したい。

### 生徒の気づきと経験の分析

表7に示した通り、生徒の気づきと経験には筆者の目標とした自律と協働より、意図しなかった項目のほうが多かった。本稿では紙面の制約から、これらの項目は扱わなかった。教室外学習を取り入れた日本語教室と日本を伝える行動の中等教育における意義をより明らかにするため、これらの項目の分析と考察を進めたい。

### 参考文献

- 押尾和美・木谷直之・根津誠・八田直美・前田綱紀(2004)「異文化理解を目的とした交流活動のあり方—外国人日本語教師と中高生の協働によって作られる授業—」『日本語国際センター紀要』第14号 国際交流基金日本語国際センター 33-50
- 木谷直之・前田綱紀(2006)「外国人日本語教師と高校生ボランティアの協働による素材収集型交流活動の意義—高校生ボランティアの気づきに注目して—」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号 国際交流基金 31-47
- 佐久間勝彦(2006)「海外に学ぶ日本語教育—日本語学習の多様性—」『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』国立国語研究所編 アルク 33-64
- 杉澤経子(2002)「学校と地域の連携を考える—地域に暮らす外国人とともにつくる授業—」『わーい、外国人が教室にやってきた!』武蔵野市国際交流協会 29-36
- 土屋千尋(2005)「外国人集住地域における日本語教室活動—相互理解と課題発見のための日本語コミュニケーション—」『日本語教育』126号 日本語教育学会 25-34
- 宮崎玲子・阪上彩子(2009)「ハンガリーの大学で学ぶ日本語学習者のビリーフ」『日本・ハンガリー協力フォーラム事業 ハンガリー日本語教育シンポジウム 2008 論集』ハンガリー日本語教師会・国際交流基金ブダペスト日本文化センター 22-31
- 山西 優二(2002)「国際理解教育とは—そのねらいとその方法—」『わーい、外国人が教室にやってきた!』武蔵野市国際交流協会 9-16
- 若井誠二・岩澤 和宏(2004)「ハンガリー人日本語学習者のビリーフス」『日本語国際センター紀要』第14号 国際交流基金日本語国際センター 123-140
- Wakai Szeidzsi, Somodi Júlia (2006)『みんなのほんご I Nyelvtani magyarázatok Károli Gáspár Református Egyetem Intenzív nyelvtanfolyam』Károli Gáspár Református Egyetem Japán Tanszék 財団法人国際文化フォーラム “Deai Website” [www.tjf.or.jp/](http://www.tjf.or.jp/) 2010年8月15日
- 西川純(2008)『学び合い』の手引書 <http://www004.upp.so-net.ne.jp/iamjun/tebiki/tebiki.pdf> 2010年8月15日